

Ⅲ 調査結果からみえる課題

<調査結果のまとめ>

- 自分がヤングケアラーにあてはまると思うかについて聞いたところ、小学生で2.0%、中高生で1.1%が「あてはまる」と回答しており、「わからない」の割合は小学生で20.5%、中高生で13.1%となっている。
- 家族の中にお世話をしている人が「いる」と回答した割合は、小学生で6.7%、中高生で2.8%となっており、お世話をする理由としては、小学生、中高生ともに「家族の中の大人が仕事で忙しいため」の割合が最も高くなっている。
- また、家族の中にお世話をしている人が「いる」と回答した人は、「宿題をする時間や勉強する時間が取れない」、「自分の時間が取れない」、「睡眠が十分に取れない」といった影響が出ていると答えている。
- さらに、家族の中にお世話をしている人が「いる」と回答した人のうち、お世話やなやみを誰かに相談したことが「ない」の割合は小学生で59.4%、中高生で56.7%となっている。
- 学校や周りの大人に助けてほしいことや、手伝ってほしいことについては、小学生で「勉強を教えてほしい」、「自由に使える時間がほしい」、「自分のことについて話を聞いてほしい」の割合が高くなっており、中高生においても「自由に使える時間がほしい」、「学校の勉強や受験勉強など学習のサポート」、「自分のいまの状況について話を聞いてほしい」の割合が高い。

<課題>

- これらの調査結果を踏まえると、自分自身の時間の大部分を家族のケアに充てることで、学習時間や睡眠時間の減少につながり、結果として、学力低下や心身の健康状態の悪化につながる可能性があると考えられる。
- また、家庭内で家事を担うことは、必ずしも問題につながるとは限らないが、学校生活に支障をきたすような程度の負担を子どもが担うことは、子どもが持つ権利が侵害される状況でもあり、また日常生活にも大きな影響を及ぼすことにもつながり、早急な支援が求められる。
- 早期発見のためには、子ども自身が置かれた状況を認識することが大切であり、そのためにも、ヤングケアラーの正しい認識について広めていくこと、また、そのような状態に陥ったときでも、支援の手段があることについて、周知啓発をしていくことが重要となる。
- さらに、ヤングケアラーが家庭内のプライベートな問題であることから、支援が必要な状況にあっても表面化しづらい構造であることが指摘されている。そのため、そのような状態に陥ったことを、学校等での気づきによる早期発見が可能な体制づくり、また、子どもが助けを必要とする状態になったとき、声をあげられる関係づくりや環境づくりが求められる。
- 同時に、子どもが支援を必要とする場合においても、デリケートな問題であることを踏まえ、まずはしっかりと子どもの話を聞き、そして子どもに寄り添う姿勢が求められる。
- なお、今回の調査で回答しなかった層にも、一定程度の支援が必要なヤングケアラーが存在している可能性があることも考慮する必要がある。